



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	注意概念を用いたソ系の分析と談話管理理論
Author(s)	平田, 未季
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 18, 213-229
Issue Date	2014-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55155
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	Jimcts18_12_Hirata.pdf



注意概念を用いた ソ系の分析と談話管理理論

北海道大学大学院国際広報メディア研究科博士後期課程

平田 未季

An analysis of Japanese so-form using
the concept of 'attention' and
Discourse Management Theory.

HIRATA Miki

abstract

Kinsui and Takubo (1992b) and their other studies have proposed Discourse Management Theory in which they attempt to provide an integrated explanation of the deictic and non-deictic use of Japanese demonstratives. Although their explanation has been influential, their attempt has not been successful in the sense that it treated the deictic use of *so-* as an exception. This paper argues that the concept of 'addressee's attention', a concept which was introduced into typological studies of demonstratives around the year 2000, makes it possible to truly integrate the deictic and non-deictic use of *so-* so that deictic use of *so-* is positioned in Discourse Management Theory naturally. In addition, it is shown that 'addressee's attention' makes the contrastive analysis of *so-* and the middle terms in other languages possible.

平田
未季
HIRATA Miki

1 はじめに

指示詞は、話し手が言語外世界で知覚可能な対象を指す現場指示用法と、言語的文脈によって導入された対象を指す文脈指示用法を持つ¹（金水・田窪 1992b：187）。金水・田窪による一連の研究（金水・田窪 1992b、田窪・金水 1996、金水 1999、田窪 2008等）は、指示詞の現場指示用法と文脈指示用法を統一的に分析する理論的枠組みとして談話管理理論を提唱した。

談話管理理論では、言語表現と外的世界をつなぐ中間構造として、話し手の知識を格納する心的領域を仮定する（金水・田窪 1992b：183、金水 1999：69）。この心的領域は、現場の事物の知覚等によって得られた知識が格納される「直接経験領域」と、主に言語的な概念によって得られた知識が格納される「間接経験領域」に二分される。談話管理理論では、日本語指示詞のうち、コ系・ア系は「直接経験領域」に含まれる要素を、ソ系は「間接経験領域」に含まれる要素を探索せよという指令であると規定される（金水・田窪 1992b：186、田窪・金水 1996：65-6）。そのため、コ系・ア系は話し手が知覚した対象を直接指示しうが、「間接経験領域」の探索指令であるソ系は、その指示において必ず言語的な先行詞を必要とする。彼らの談話管理理論に基づくコ系、ア系、ソ系の特徴付けは、それ以前の指示詞研究で統一的な説明が困難であった日本語指示詞のいくつかの問題を解決しうるものであり、その後の日本語指示詞研究における分析の枠組みとなった。

しかし、この談話管理理論の枠組みは、ソ系の現場指示用法を例外的に扱うことで成立している理論である。談話管理理論では、ソ系は言語的先行詞を介した間接指示を行う形式として定義されているが、実際は、金水・田窪（1992b）も認める通り、ソ系は言語的先行詞に依存せずに現場の事物を直接指示する「聞き手領域指示」用法及び「中距離指示」用法を持つ。金水・田窪（1992b）は、これらの用法は「見せかけの意義であり他の原理の複合による効果」（p.177）であるとし、この原理の「積極的な性格付けがおそらく理論の新展開への突破口となるはずである」（p.184）と述べている。しかし、その試みは未だ成功しているとは言いがたい。

本稿では、金水・田窪（1992b）の「言語的な先行詞を介した間接指示」という概念の代わりに、近年の類型論的な指示詞分析で用いられている「聞き手の注意」（addressee's attention）という概念を用いて、ソ系を再記述する。日本語指示詞の分析に「聞き手の注意」という概念を導入することによって、談話管理理論の枠組みの中にソ系の現場指示用法を位置づけることが可能になる。本稿の構成は以下の通りである。まず2節で、金水・田窪の一連の研究が提唱した談話管理理論と、それを用いた指示詞分析を紹介し、その問題点を指摘する。3節では、「聞き手の注意」概念を用いたソ系の現場指示用法の分析を提案し、4節では、「聞き手の注意」概念を用いることで、2節で指摘した問題点が解決され、ソ系の現場指示用法が談話管理理論に自然に組み

►1 本稿は、金水・田窪（1992b）による現場指示用法と文脈指示用法という用語を用いるが、談話管理理論に関わる一連の研究では他にも、直示用法と非直示用法（金水 1999）、直示用法と文脈照応用法（金水・岡崎・曹 2002）等、異なる用語が用いられている。以下にそれらの違いを簡単に述べる。

直示用法は「談話に先立って話し手がその存在を認識している対象」を直接指す用法と定義されており（金水 1999：67）、金水・田窪（1992b）の現場指示用法とは異なり、その指示対象が含まれる領域は発話の現場に限られない。例えば、話し手が過去に認識した対象を指すア系の記憶指示用法も直示用法と見なされる。金水（1999）では、本稿が用いる現場指示用法は、「狭義の直示用法」と呼ばれている。

これに対応する概念として金水（1999）が用いる非直示用法は、ア系の記憶領域指示、コ系の談話主題指示等も含む広い概念として設定されており、直示用法の指示範囲と一部重なりがあるように思われる。一方、金水・岡崎・曹（2002）が用いる文脈照応用法は、当該指示詞が言語的先行詞と同一指示的（co-referential）である場合のみを指す概念であり、非直示用法はもちろん、本稿が用いる文脈指示用法よりも限定された用法を指す。

本稿が用いる金水・田窪（1992b）の文脈指示用法は、金水（1999）の非直示用法とほぼ同じ意味で用いられている。しかし、対応する概念が「狭義の直示用法」である現場指示用法であるため、非直示用法と直示用法のように、指示範囲の重なりは生じない。

込まれることを論じる。

2 談話管理理論におけるソ系の記述とその問題点

2-1 談話管理理論以前の指示詞研究

コ系、ア系、ソ系に含まれる一群の形式を「指示詞」として定義した佐久間（1951）以来、日本語指示詞は国語学・日本語学にとどまらず、発達心理学、対照言語学など様々な分野で活発に研究されてきた。

しかし、日本語指示詞の研究史を概観した金水・田窪（1992b：184-5）は、従来の日本語指示詞研究には、主にソ系の記述に関し、以下の3つの解決すべき問題があると論じた。1つ目は、ソ系の現場指示が「聞き手領域指示」と「中距離指示」という機能の異なる2つの用法を並立して持つと記述されていることである（阪田 1971、正保 1981参照）。このソ系の2つの用法を記述するため、日本語指示詞体系には人称区分と距離区分という異なる概念体系が仮定されており、理論が複雑化していた。

2つ目は、ソ系の文脈指示の記述において「聞き手の知識」という概念が用いられていたことである。日本語指示詞の文脈指示用法の分析は、(1) のような例におけるソ系とア系の対比を説明することを中心に進められてきた。

(1) 文脈指示用法におけるソ系とア系

話し手：昨日山田さんという人に会いました。{その／*あの} 人、道に迷っていたので、助けてあげました。

聞き手：{その／*あの} 人、ひげをはやした中年の人でしょ。

話し手：はい、そうです。

聞き手：{その／あの} 人なら、私も知っています。私も {その／あの} 人を助けてあげたことがあります。（久野 1973：70）

Kuno（1973：290）は、ア系は話し手と聞き手の共有知識内にある対象を、ソ系は共有知識内にはない対象を指すと定義し、(1) におけるア系とソ系の使い分けは、話し手と聞き手がその対象に関する知識を共有しているか否かに基づくと述べた。しかし、田窪・金水（1996）は、ある命題Pが共有知識であることを話し手が確認しようとする、以下のように埋め込みが無限に続く「相互知識のパラドックス」に陥ることを指摘した。

(2) 相互知識のパラドックス

1. 話し手がPを知っている。

1'. 聞き手がPを知っている。

2. 話し手が1'を知っている。

- 2'. 聞き手が1を知っている。
 3. 話し手が2'を知っている。
 3'. 聞き手が2を知っている。… (田窪・金水 1996: 60)

仮に、対話における共有知識は真の共有知識ではなく、共有性の仮説に過ぎないとしても、ある形式が「話し手が_i、聞き手が_jを知っていることを知っている」という想定を意味として持つとした時点で、形式の記述に埋め込みや視点の切り替え操作という計算に大きな負担をかける要素が含まれることになり、瞬間的・無意識的に形式選択がなされる言語使用の実態に合わない(田窪・金水 1996: 61-2)。以上の議論から、田窪・金水(1996: 62)は、Kuno(1973)によるア系・ソ系の記述を批判し、言語の意味記述において「聞き手の知識」を想定するべきではないという「聞き手の知識の原則」を主張した。

3つ目の問題点は、以上のように個別的に分析が進められてきたソ系、そしてコ系・ア系の現場指示用法と文脈指示用法を統合するような理論的枠組みが欠如している点である。

これらの問題を解決する方向性を示す研究として、金水・田窪は、黒田(1979)の分析を挙げる。黒田(1979)は、(1)のような例におけるソ系とア系の対比を、共有知識の有無ではなく、話し手の「直接的知識」、「概念的知識」という観点から説明した。

(3) 黒田(1979)によるソ系とア系の意味記述

ソ系：対象を概念的知識の対象として指向する

ア系：対象を直接的知識の対象として指向する(黒田 1979: 102)

黒田(1979)の分析に基づけば、(1)のような例におけるソ系の使用は、話し手がその対象を概念的にのみ把握していることを示し、ア系の使用は、過去の経験などにより話し手が対象を直接的に知っていることを示す²。

このように、黒田(1979)は、ソ系とア系の意味記述から「聞き手の知識」を排除することで、Kuno(1973)の記述における「相互知識のパラドックス」を解消した。黒田(1979)の意味論的分析は、金水・田窪の一連の研究に大きな影響を与えた。ただし、黒田(1979)の分析の中心はソ系とア系の文脈指示用法であり、現場指示用法に関する詳細な記述はほとんどない。またコ系に対する言及も見られない。

金水・田窪(1992b)は、黒田(1979)の枠組みを指示詞全体に拡張することで、日本語指示詞の現場指示用法と文脈指示用法を統一的に説明する理論が構築できると考え、その実現形として談話管理理論を用いた指示詞分析を提唱した。次節では、談話管理理論とその枠組みを用いた日本語指示詞の分析を紹介する。

2-2 談話管理理論による日本語指示詞分析

談話管理理論は、言語表現と外的世界をつなぐ位置に話し手の知識を格納する中間構造としての心的表示を仮定する。金水・田窪は、指示詞の指示領

- ▶2 ソ系・ア系の説明から「聞き手の知識」を排除することで、以下のように、明らかに聞き手が知識を有さない対象をア系で指すことも説明が可能になる。
- (i) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくといよ。(黒田 1979: 101)
- 金水・田窪(1992b: 181)、金水(1999: 75)は、ア系は本来(i)のように「聞き手の知識」を考慮せずに用いることができる形式であると述べ、本文(1)の例のように、指示対象に対する「聞き手の知識」に配慮してア系ではなくソ系を用いることは、「聞き手負荷制約」という社会的な配慮に基づくと説明した。

- 3 ア系の記憶指示用法とは、(ii)のように話し手の長期記憶内の対象を指す用法であり、コ系の文脈指示用法とは、(iii)のようにその指示において言語的先行詞を必要とする用法である。
- (ii) 神戸で食べたあの肉饅頭、おいしかったなあ。(金水 1999 : 72)
- (iii) 今から、お話をします。主人公は医者にしましょう。名前を仮に、田中さんとします。この男はとても腕のいい心臓外科医です。(金水 1999 : 77)
- 金水 (1999) は、(ii) のア系の記憶指示は空間的遠方から過去の経験という時間的遠方への拡張によると、(iii) のコ系の文脈指示は談話直示 (discourse deixis) の一種であると述べ、どちらも現場指示の拡張であるとする。
- 4 他のソ系の特殊用法として「そのはず」「その気」「そんなに」「それほど」等の慣用表現が挙げられている。金水 (1999:84) は、これらの用法も、ソ系が「間接経験領域」を指示領域とするため指示対象が確定的ではないことにより説明されると述べている。
- 5 (4a) は、指示表現が数量詞に統語的に束縛されている狭い意味での束縛変項照応である。一方、(4b) は、ソ系の束縛変項照応解釈において、統語的束縛は必須条件ではなく、線上的な先行が成立していれば、文境界を越える照応でも分配的解釈が生じることを示す例である (金水 1999 : 82-3)。上山 (2000)、Hoji et al. (2003) 等、統語論的な指示詞分析では両者の違いに関する詳しい言及があるが、本稿では両者とも束縛変項照応としての解釈を持つことのみ注目し、統語論的な差異については論じない。

域を発話の現場や談話文脈そのものではなくこの心的領域とすることで、現場指示用法と文脈指示用法を統一的に議論することを可能にした。

この心的領域は、1節で述べた通り、さらに「直接経験領域」と「間接経験領域」に二分される。「直接経験領域」には、話し手が現場で知覚した事物、及び話し手の過去の経験に基づく知識が格納される。これに対し、「間接経験領域」には、主に言語的な概念によって導入された知識が格納される (金水・田窪 1992b:186)。金水 (1999) は、「直接経験領域」を指示領域とするコ系・ア系は本質的に直示的であり、現場で知覚できない対象を指すア系の記憶指示用法も、コ系の文脈指示用法も、全て現場指示用法の拡張であると論じた³。

一方、「間接経験領域」の探索指令であるソ系は、言語的文脈によって概念的に設定された領域を値域とするため、その指示は言語的先行詞に依存している。金水 (1999 : 81-5) は、ソ系の束縛変項照応としての解釈や、曖昧指示等の特殊な用法⁴は、ソ系が言語的先行詞に依存する間接指示的な形式であることの帰結として説明可能であると主張した。

(4) 束縛変項照応としての解釈⁵

- a. 55%の自動車会社が{*ここ/*あそこ/そこ}の弁護士を解雇したらしい。
- b. 学生たちは一生懸命論文を書いた。しかし結局誰も{*この/*あの/その}論文を教授に提出しなかった。

(金水 1999 : 82-3、容認性判断は筆者)

(5) 曖昧指示表現

A : お出かけですか

B : ええ、ちょっとそこまで (金水 1999 : 85)

(4) でコ系・ア系を用いた場合、束縛変項照応としての解釈は成り立たない。金水 (1999) は、このコ系・ア系とソ系の違いは、「直接経験領域」と「間接経験領域」という指示領域の違いに由来すると述べる。先述の通り、「直接経験領域」は言語外世界で話し手が直接知覚した要素を含むため、そこを指示領域とするコ系・ア系の指示対象は、言語外世界に唯一的、確定的に存在していることが前提となる。従って、(4) でコ系・ア系を用いた場合、その対象は言語的先行詞から独立した現場、もしくは記憶内の確定的な存在となる。

これに対し、言語的文脈によって形成される「間接経験領域」は概念的に設定された領域であり、そこに含まれる要素が言語外世界に存在することは前提されていない。そのため、「間接経験領域」を値域とするソ系は、コ系・ア系とは異なり、(4) のように、先行詞と連動する変域としての対象を指示することができる。

一方、(5) では、「そこ」の指示領域を規定する言語的先行詞はなく、「そこ」は指示の値を持たないように見える (金水 1999 : 85)。これは、ソ系が言語外世界に確定的な値を持たないことを積極的に利用した用法であり、話し手はソ系を用いることで、あえて指示対象を非特定のなものとして示すという

効果を出していると金水（1999）は論じる。（5）の文脈で、ア系を用いた場合、聞き手は確定的な場所が指示されていると解釈する。

以上のように、談話管理理論は中間構造としての心的表示を仮定し、それを、黒田（1979）が導入した直接経験的知識と概念的知識の区別を踏まえ、「直接経験領域」と「間接経験領域」の2つに分ける。これによって、金水・田窪（1992b）が従来の指示詞研究の問題点として指摘した、「聞き手の知識」を想定した文脈指示用法の説明が排除され、さらに現場指示と文脈指示を統一的に分析する理論的枠組みを構築することができる。

それでは、最初の問題点であったソ系の現場指示が「聞き手領域指示」と「中距離指示」という機能の異なる2つの用法を並立して持つように見えることは、談話管理理論の枠組みでどのように説明されるのだろうか。2.1節で見た通り、談話管理理論はソ系とア系の文脈指示用法の再分析をその出発点としており、ソ系の現場指示用法については、文脈指示用法の分析によって得られた枠組みを当てはめることで説明を試みている。そのため、ソ系の現場指示用法に対しては文脈指示用法ほど積極的な説明がなされていない。金水・田窪（1992b）では、ソ系の現場指示用法は、コ系・ア系の「埋め草」と位置づけられている。金水・田窪（1992b）によれば、「聞き手領域指示」は、聞き手の存在により話し手が対象を近距離とも遠距離とも特徴付けられない時に用いられる用法であり、「中距離指示」は近距離、遠距離が決定された後に生じる副次的な領域を指す用法である。すなわち、談話管理理論において、ソ系の本質はあくまで文脈指示であり、「聞き手領域指示」と「中距離指示」はどちらも、聞き手というコミュニケーション上の要請によって「コ系やア系のすきまを埋める」（金水・田窪 1992b：184）ために生じる用法として特徴付けられている。

本稿では、談話管理理論を、日本語指示詞の現場指示用法と文脈指示用法の統一的分析を可能にする枠組みとして高く評価するものの、以上のソ系の現場指示用法の分析には経験的及び理論的問題があると考ええる。その根拠を2.3節で述べる。

2-3 ソ系の現場指示用法の記述に関する問題点

前節で紹介した談話管理理論によるソ系の現場指示に対する説明には、経験的な問題が2つと、理論的な問題が1つある。

経験的な問題の1つ目は、「コ系やア系のすきまを埋める」（金水・田窪 1992b：184）という特徴付けでは説明できないソ系の使用例が多く存在することである。ソ系が実際に用いられている場面を観察すると、ア系で指示された対象をソ系で指し直す場面が多く見られる（平田 2013参照）。その1つとして（6）を挙げる。（6）は、日本語母語話者2名の自発的な会話をビデオ録画し、それを書き起こしたものの一部である。

（6）ゼブラ柄のビル

（女性2人が展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り、正面に広がる景色を見ている。Aは共通の友人が住んでいるビルの場所をBに教えようと

する。)

- a. A: (指さしをしながら) あそこ見て。斜めに森あるでしょ。
- b. B: (Aの指さしに合わせて顔を動かす)
- c. A: そこの裏! 白黒のゼブラ柄のビル、ゼブラ柄の。
- d. B: え、どれ、どれ? (指さしをしながら) あの鉄塔が近いやつ?
- e. A: (Bの方を見た後、正面に顔を戻し指さし) それ! それ!
白と黒…黒じゃないな、グレーの。Bのまっすぐ前。
- f. B: あー、あれ…かなあ
- g. A: (Bの方を見て) そうそう、(顔を正面に戻し) ねずみ色のやつ。
それがCちゃん住んでるんだよね。

■図1 (6a, b): Aが指さしをし、BはAの指さしに合わせて顔を動かす



■図2 (6d): Bが指さしをする



■図3 (6e) : AはBの方を見てBの視線を確認した上で、ソ系を用いて指示



(6a) において、Aは意図する指示対象をア系を用いて指しているが、その後、(6c) では、指示対象とほぼ隣り合っているビルを「そこ」で指し、(6e, g) では、ア系で指したのと同じ対象を「それ」で指している。これらの対象は発話場面で知覚可能な対象であり、また、話し手Aは指さしジェスチャーを用いながらソ系を発話しているため、(6c, e, g) のソ系が言語的先行詞に依存した文脈指示を行っているとは考えられない^{6,7}。また、このソ系が現場指示だとすると、金水・田窪 (1992b) の説明によれば、その指示対象は近距離とも遠距離とも特徴付けられない対象でなければならない。しかし、これらのソ系で指示されている対象は、ア系で一度指示された対象、もしくはそれに近接する対象であり、一連の談話において談話参加者から遠距離という特徴付けをされている。以上のように、ソ系の現場指示用法はコ系とア系の「埋め草」であるという消去法的な特徴付けでは、(6c, e, g) におけるソ系の使用は説明することができない。

2つ目の経験的な問題として、(6) のような例におけるソ系の用法を「中距離指示」と記述することの正当性が挙げられる。(6) のように談話参加者であるAとBから等しく離れている対象を指すソ系は、談話管理理論以前の研究では「中距離指示」と記述されてきた。しかし、(6) のソ系は、上述の通り、遠称であるア系と同一の対象を指しており、距離概念ではその交替要因を説明することができない。金水・田窪 (1992b:188)、金水 (1999:86) は、「中距離」とは見せかけの意義であることを指摘し、それが独り言で現れないこと、及び聞き手への教導や注意喚起の場面で多く用いられることから、「中距離指示」とされてきた用法もまた「聞き手領域指示」と同様に聞き手の存在を前提とする形式であることを示唆している。しかし、それ以降の研究においても、この用法がどのように聞き手と関連しているのかについて具体的な説明は加えられていない。

最後に、ソ系の本質は言語的な先行詞に依存した指示であるとする談話管理理論の説明には理論的な問題がある。金水 (1999:67) は、ソ系は「本質

▶6 85の言語サンプルをもとに世界の指示詞体系を記述したDiesel (1999:94) は、指さし行為は、本稿の現場指示用法に当たる外部照応用法 (exophoric use) の特徴であり、言語的先行詞を指す用法には指さし行為は見られないと述べている。

▶7 特に (6g) の「それ」は、先行する言語的先行詞を指す文脈指示用法と説明されるべきだと思うかもしれないが、Aが眼前にある対象をソ系の文脈指示用法によって指示していると解釈することは、直示によって指示を行うことができるならば、非直示よりも直示による指示が優先されるという日本語における「直示優先の原則」(金水 1999:76) に反する。

►8 Diessel (1999) は、幼児が言語を習得する際文脈指示よりも外部照応用法の方が早くから見られるという発達心理学的な根拠、外部照応用法を担う指示形式は多くの言語で文脈指示を担う形式に比べ形態的に無標であるという形態的な根拠、そして多くの言語において外部照応用法の文法化によって文脈指示用法が派生しているという通時的根拠に基づき、指示詞では通言語的に外部照応用法がプロトタイプであり、そこから文法化によって言語的な対象を指す用法が派生してきたと論じている。

►9 金水・岡崎・曹 (2002) は、ソ系において文脈指示用法が本質であると思われる経験的な根拠として、通時的な証拠があることを示唆している。金水・岡崎・曹 (2002: 231) は、現在入手可能な最も古い7, 8世紀の文献において、ソ系は、文脈指示用法は多数見られるのに対し、明らかに現場指示であると解釈できる例は見当たらないと述べる。しかし、彼らはこの観察について、「韻文中心という資料的制約」も十分考慮する必要があると保留を加えており、この通時的な観察が、ソ系が文脈指示用法を原型とすることの決定的な証拠とまでは言えないということも述べている (岡崎 2010 も参照)。

的に直示の性格が認められ」ない形式であり、「主に言語的な表現によって談話に導入された要素を指し示す」としているが (金水・岡崎・曹 2002 も参照)、この説明には理論的な面において次の2つの問題があると思われる。まず、ソ系の本質は文脈指示で現場指示はその副次的な用法であるとした場合、ソ系は抽象の意味から具体的意味を派生させたことになる。これは、認知言語学、及び文法化の一方方向性仮説など言語一般的な理論で仮定されている具体から抽象へという語の変化の方向性に逆行する。また、これは類型論的な研究が仮定する指示詞の文法化の方向性にも反する⁸。次に、談話管理理論では、ソ系の本質は文脈指示であるが、コ系・ア系は現場指示を原型とすると述べている。この説明によれば、日本語指示詞体系に含まれる形式のうち、コ系・ア系は言語一般的な語の変化の方向性に合致しているが、ソ系はそれに逆行していることになり、日本語指示詞体系に異なる2つの派生過程を想定することになってしまう。複雑な理論を日本語指示詞に仮定するのであれば、それを説明する根拠が必要だと思われるが、談話管理理論では、コ系・ア系の原型が現場指示であるのに対し、ソ系の本質は文脈指示であることは前提として提示されており、それに対する説明はほとんど見られない⁹。

以上の3点から、筆者は、談話管理理論を用いて日本語指示詞を統一的に説明するためには、ソ系の現場指示用法、特に「中距離指示」の再分析が必要だと考える。ソ系の現場指示用法の再分析において、本稿ではDiessel (1999, 2006)、及びEnfield (2009) の類型論的な指示詞研究の枠組みを用いる。彼らは、指示詞がその使用場面で果たす語用論的な機能を重視し、指示詞が用いられる場面を詳細に観察することによって指示詞の意味を記述しようとした。彼らの枠組みを用いてソ系の現場指示用法を再分析することで、ソ系は言語的先行詞に依存した指示を行うという談話管理理論の前提と、そこから生じる説明上の問題点を解消することができると考えられる。

3 「聞き手の注意」概念を用いたソ系の直示用法の記述

3-1 指示詞の機能と意味

85の言語における指示詞体系を分析したDiessel (1999, 2006)、そしてフィールドワークによる発話場面の詳細な観察から指示詞の意味と機能を考察したEnfield (2009) は、従来の類型論的指示詞研究が、「近」、「遠」という定義の不十分な、また先験的 (a priori) な根拠を持たない概念に基づいて各言語の指示詞を分析していたことを批判し、指示詞がその使用において果たす機能を見直す必要性を訴えた。

Diessel (2006) は、指示詞を、対話相手の共同注意 (joint attention) の焦点を調節する形式であると定義する。また、Enfield (2009) は、指示詞は、談話参加者が互いの意図する対象を特定するという協調問題 (coordination

problem) の解決を基本的な機能として持つ形式であるとする。彼らは、指示詞が持つ意味とは、共同注意の形成、もしくは協調問題の解決という目的を達成するために聞き手に与えられる手がかりであると考え。例えば、指示詞が持つ空間情報は、対象が「どこ」にあるかという話し手の空間認知を示すことではなく、話し手が「どれ」について話しているのかを聞き手が特定できることを目的としており、そこには、共同注意の形成や協調問題の解決に対する話し手の想定が含まれている (Diessel 1999 : ch.3, Enfield 2009 : 30-1)。

この話し手の想定をより直接的に示す手がかりとして、Diessel (2006) は「聞き手の注意」という概念を提示する。Diessel (2006 : 470) は、共同注意の形成過程において、指示詞は (i) 聞き手の注意が向けられていない対象を指す機能と、(ii) 既に聞き手の注意が向けられていた、もしくは現在向けられている対象を指す機能の両方を果たすと述べ、いくつかの言語においては、この対象に対する聞き手の注意の有無が、指示形式の選択に関わる意味としてコード化されていることを指摘した。その代表的な例として彼が挙げるのがトルコ語である。

トルコ語はbu、şu、oの3つの指示形式を持つ3項体系であるが、Özyürek (1998) 及びKüntay and Özyürek (2006) は、自発的な相互行為場面の観察や実験に基づき、bu、oがそれぞれ話し手から「近」「遠」という距離概念をコード化するのに対し、şuはいかなる距離情報も示さないこと、şuは指示詞を含む発話時に聞き手の視覚的注意 (visual attention) が向けられていない対象を指すのに用いられることを示した。Özyürek (1998) が提示したşuを含む自然談話データの一部を (7) に示す。以下の例において、話し手は、新しい指示対象を談話に導入する際はşuを用い、その後もう一度その対象に言及するときはoを用いている。

(7) 楕円形の物体

(教師と学生が陶器が置かれた机の周りに立っている。学生は教室の隅にある楕円形の物体を指し、それを机の上の陶器に装着することを提案する)

a. mesela hoca-m şu oval mesela
 例えば 先生-属格1人称単数 指示決定詞 楕円形の物 例えば
 “sir for example, this/that oval for example”

b. şu-nun dis yuzey-i-ne koy-up ta
 指示代名詞-属格 外 表面-所有格-与格 置く-接続形 条件
 “if you put on this’ s outside surface”

c. o-ndan da ol-abil-ir
 指示代名詞-奪格 も なる-可能-超越時制
 “it might be from that too”

(Özyürek 1998 : 606-607、英語は原文まま、統語情報は筆者による)

(7) の例が示すように、şuは、Diessel (2006 : 480) が「聞き手の注意が向

けられていない対象を指す」と記述した機能を意味として持つ形式である。Küntay and Özyürek (2006 : 206) は、このşuの意味を「聞き手の注意の不在 (absence)」と記述した。

3-2 「聞き手の注意の存在」を示すソ系

本稿では、距離概念による記述が困難であったいわゆる「中距離指示」のソ系も、トルコ語のşuと同様、「聞き手の注意」という概念を意味として持つ形式だと考える。ただし、şuが「聞き手の注意の不在」を示すとすれば、ソ系はそれとは対照的に「聞き手の注意の存在 (presence)」を示す形式である。その根拠はソ系とşuとの対照的な分布である。şuの場合、一連の談話で聞き手がまだ視覚的注意を向けていない対象、典型的には (7) に見られるように新しい対象を談話に導入する際に用いられるが、(6) のソ系は、ア系等の言語的先行詞、及び指さしジェスチャー等によって聞き手が既に視覚的注意を向けたと話し手が解釈可能な対象を指している (平田 2013)。従って、ソ系は、şuとは反対に、Diessel (2006 : 480) が「既に聞き手の注意が向けられていた、もしくは現在向けられている対象を指す」と記述した機能を意味として持つ形式だと考えられる。

Diessel (2006) は、この「聞き手の注意」概念は発話場面から談話世界へ拡張されると論じる。Diessel (2006 : 481) は、指示詞を対話相手の共同注意的な焦点を調節する形式と定義し、発話場面では対象への物理的視線と解釈される聞き手の注意という概念は、言語的な談話内では言語的な対象に向けられる注意として解釈されると述べた。

このDiessel (2006) の枠組みに基づけば、発話場面で「聞き手の注意」の有無に関して対照的に用いられるşuとソ系は、文脈指示においても対照的に用いられることが予測される。そして文脈指示におけるşuとソ系は、以下の通り予測と一致した対照的分布を示す。

(8) 前方照応

Bugün ders yok-muş ama,

今日 授業 ない-伝聞 が

{bu-nu / *şu-nu} hiç bil-mi-yor-du-m.

指示代名詞-対格 全く 知る-否定-状態-過去-1人称単数

「今日は授業がないそうですが、私は {それ/これ} を全く知りませんでした」

(9) 後方照応

Hasan-a {bu-nu / şu-nu} şöyle-yeceğ-im,

ハサン-与格 指示代名詞-対格 言う-未来-1人称単数

“Anne-n-i meraklan-dır-ma.”

母-属格2人称単数-対格 心配する-使役-禁止2人称単数

「ハサンに {*そう/こう} 言うつもりです。『君の母親を心配させるな』

(林 1989 : 100, 容認性判断及び統語情報は筆者¹⁰)

▶10 容認性判断は、日本在住のトルコ語母語話者3名に対する質問紙を用いた調査に基づく。

(10) 文脈指示におけるsuとソ系の分布

	トルコ語	日本語
前方照応	*su / bu	ソ系／コ系
後方照応	su / bu	*ソ系／コ系

発話場面で「聞き手の注意の不在」を示すsuは、談話・テキスト内では指示詞を含む発話の発話時にまだ先行文脈に導入されていない、すなわち聞き手が注意を向けることが不可能だと解釈される言語的対象を指す。それに対し、発話場面で「聞き手の注意の存在」を示すソ系は、談話・テキスト内では指示詞を含む発話の発話時に先行文脈に既に導入されている、すなわち聞き手が既に一度注意を向けた、あるいは現在も向けていると解釈できる言語的対象を指す。文脈指示におけるsuとソ系の対照的な分布は、ソ系は「聞き手の注意の存在」を示すという本稿の主張を裏付けるものであると同時に、聞き手の注意という概念を介することで直示用法と非直示用法の統一的な分析が可能になることを示している。

以上の議論をもとに、本稿では、ソ系の「中距離指示」用法、及び文脈指示用法を「聞き手の注意の存在」を示す形式として統合し、その使用環境を以下のように一般化する。

(11) 「聞き手の注意の存在」を示すソ系の記述的特徴

発話場面で、指示詞を含む発話の発話時に聞き手が注意を向けている、もしくは発話時以前に聞き手が注意を向けていたと話し手が解釈できる対象に対し、話し手も注意を向けていることを伝え、共同注意を確立するために用いられる。

4 「聞き手の注意」と「間接経験領域」

4-1 「間接経験領域」の再定義

3節では、指示詞の語用論的な機能を重視したDiessel (2006)、Enfield (2009)の指示詞分析の枠組みを紹介し、ソ系がそれに直接的に関わる「聞き手の注意の存在」という意味を持つことを論じた。金水・田窪 (1992b : 186) は、ソ系の指示領域である「間接経験領域」を、「主に言語的な概念によって導入された知識が格納される」領域と定義し、そこには談話によって新規に導入された要素、及び談話から最低限の推論によって仮定された要素が格納されるとした。筆者は、ソ系が間接的な指示を行う形式であることには同意するが、それが上の記述のように言語的先行詞を介した指示に限られるという点には同意できない。3.2節の議論に基づき、本稿では「間接経験領域」を以下のように規定しなおすことを提案する。

- ▶11 話し手は発話場面で知覚した要素を、「直接経験領域」を通してア系・コ系で指すことも、「間接経験領域」を通してソ系で指示することもでき、その選択は任意である。では、発話場面に存在する要素を「間接経験領域」、すなわち「聞き手の注意」を通して指示する動機は何だろうか。

本稿では、現場指示で話し手がソ系を選択するのは、空間情報を示す形式よりも、「聞き手の注意の存在」を示す形式を選択することが、当該文脈において、共同注意の形成、もしくは協調問題の解決により寄与すると判断したことによると考える。話し手が「聞き手の注意の存在」を示す形式を選択したという事実は、発話場面において、聞き手が「正解（話し手が意図する対象の特定）に近付いていること」、そして「（現在注意を向けている対象から）注意をそらすべきではない」（Burenhult 2003: 374、括弧内筆者）という話し手の想定を聞き手に伝える。

- ▶12 上述の通り、談話管理理論では、ソ系が変域を指示対象とする束縛変項照応としての解釈や、特定の指示対象を持たないように見える曖昧指示等の用法を持つことについて、ソ系が「間接経験領域」を指示範囲とするため、言語外世界に特定の値を持たないことに拠ると説明している。「間接経験領域」を構成する要素を言語的表現から、本稿が主張する「聞き手の注意」に置き換えたとしても、ソ系が、コ系・ア系とは異なり「言語外世界に確定的値を持たない」対象を指しうるという特徴は変わらない。なぜなら、上述の通り、「聞き手の注意」は概念的に形成された対象にも向けられうるからである。従って、ソ系の「言語外世界に確定的値を持たない」対象を指しうるという特質から束縛変項照応としての解釈や曖昧指示が派生したという金水（1999）の解釈は、本稿の枠組みにおいても保持され则认为る。

(12) 「間接経験領域」の再定義

話し手が、「聞き手の注意が向けられていた、もしくは現在向けられている」と把握した要素を格納する心的領域

3.2節で論じたように、「聞き手の注意」は発話場面に存在する確定的な対象にも、言語的先行詞によって設定された概念的な対象にも向けられうる。従って、話し手は、発話場面で知覚した対象を「聞き手の注意」を介して間接的に指示することもできれば¹¹、言語的文脈によって概念的に設定された領域を「聞き手の注意」が向けられている領域として指示することもできる。「聞き手の注意」が向けられる対象によって、ソ系の指示領域は確定的にも、可变的にもなりうるのである。このように、「間接経験領域」に格納される対象を言語的に導入された要素に限らず、「聞き手の注意」が存在する対象とすることで、ソ系の現場指示用法と、文脈指示用法、及び（4）の束縛変項照応としての解釈や（5）の曖昧指示表現等の特殊用法を同列に論じることが可能になる¹²。

なお、ここで導入する「聞き手の注意」は、あくまで話し手を視点とした概念である。話し手は、発話場面では聞き手の視線が向けられている視覚的に確認可能な範囲を、談話文脈では既に先行する文脈に導入済みの範囲を、「聞き手の注意」が向けられている領域として解釈する。どちらも話し手が発話時に一次的に入手可能な情報に基づく判断であり、「聞き手の知識」を想定する必要はないため、「相互知識のパラドックス」は生じない。

4-2 ソ系の現場指示用法の記述に関する問題点の解決

本節では、「聞き手の注意」概念を用い「間接経験領域」を（12）のように記述することで、2.3節で指摘したソ系の現場指示用法に関する3つの問題が解決できることを示す。3つの問題を（13）にまとめる。

(13) 談話管理理論によるソ系現場指示用法の説明の問題点

- 「コ系・ア系のすきまを埋める」という消去法的な特徴付けでは説明できない例が存在する。
- 「中距離指示」用法とはどのような対象を指す用法なのか、なぜ聞き手の存在を前提とするのか、具体的な記述がない。
- ソ系の本質は文脈指示であり現場指示はその派生用法であるという説明は多くの理論的研究で得られた結論に反する。

まず、(13a) の、ソ系の現場指示用法に対する消去法的な記述については、「聞き手の注意」という概念によってソ系を再記述することで、金水・田窪（1992b: 184）が試みたソ系の現場指示の「積極的な性格付け」が可能になる。ア系が「遠」である対象を指すのに対し、ソ系は距離概念ではなく「聞き手の注意」の有無という要因に基づいて選択されると考えることで、(6) のようなア系と交替して現れるソ系の現場指示用法も説明が可能になる。ただし、3.2節では、ソ系の現場指示用法のうち、「中距離指示」のみを再分析の対象

としているため、ソ系のもう1つの現場指示用法である「聞き手領域指示」については(12)の規定では説明できない。「聞き手領域指示」については5節で後述する。

次に、(13b)で指摘した「中距離」という概念を再記述する必要があるという問題については、3.2節で議論したように、「中距離指示」とされてきたソ系の用法を「聞き手の注意の存在」を示す用法と分析することで解決ができる。話し手がこのソ系を使用する場合、(6)の例が示すように、発話場面で聞き手の視線が意図する対象に向けられている／いたと話し手が解釈できなければならないため、このソ系の使用においては聞き手の存在が前提となる。このように、「聞き手の注意」概念を導入することによって、金水・田窪(1992b:188)、金水(1999:86)が指摘した、「中距離指示」用法と聞き手との関わりについても具体的に説明することができる。

最後の問題点は、ソ系に対し、文脈指示から現場指示が派生するという一般言語理論に反する説明がなされていることである。本稿では、Diessel(2006)の枠組みに基づき、「聞き手の注意」は、発話場面に存在する確定的な対象にも、言語的な対象にも向けられうと考える。文脈指示は、発話場面に対する注意が言語的な対象に向けられることで起こると分析することによって、(11)で示した通り、「聞き手の注意」を介する指示として、ソ系の現場指示と文脈指示を統合することができる。本稿の枠組みでは、談話管理理論でソ系の本質とされていた言語的先行詞に依存するソ系の指示は、「聞き手の注意」を介した間接指示の現れの1つと解釈される。

5 「聞き手領域」の派生

これまでの議論では、ソ系の「中距離指示」用法と文脈指示用法が「聞き手の注意の存在」を示す用法として統合できること、それに伴い、「間接経験領域」を規定しなすことでソ系の現場指示用法が談話管理理論の枠組みに位置づけられることを示した。しかし、ソ系の現場指示は、「中距離指示」用法に加え、「聞き手領域指示」用法を持つ。「聞き手領域指示」用法についての分析がなければ、ソ系の現場指示用法を全て説明したとは言えない。

本稿では、「聞き手領域指示」とは、「聞き手の注意の存在」を示す形式から派生したより有標な用法だと考える。その根拠の1つとして、Burenhult(2003)の認知的な分析を紹介する。Burenhult(2003)は、フィールドワークによる観察と実験に基づき、ジャハイ語(Jahai)指示詞tonを、発話場面で聞き手が視覚的注意を向けている対象を指す形式として記述した。これは、本稿が定義する「聞き手の注意の存在」を示すソ系の現場指示用法と同じ用法である。それに加えてtonは、やはりソ系と同様に、発話場面で聞き手に近接する領域を指す用法をも持つ。ただし、Burenhult(2003:367)は、tonにおいてこの「聞き手領域指示」は二次的な用法であるとし、tonが聞き手に近

接する対象を指すように見えるのは、聞き手に近接した位置にある対象には聞き手が注意を向けやすいことから生じた典型性効果 (typicality effect) によると分析した。すなわち、tonにおいては、対象に聞き手が注意を向けているという状態がプロトタイプであり、「聞き手領域指示」は、聞き手が自らの近くに存在する対象に注意を向けているという場が繰り返し経験される中で慣習化した用法だと解釈されるのである。

筆者は日本語指示詞のソ系においても、tonと同様に、「聞き手の注意の存在」を示す用法から「聞き手領域指示」という用法が派生した可能性があると考ええる。Enfield (2009:31) は、指示詞がその体系に新たに意味を加える場合、それはより協調問題の解決に寄与する特定のな情報であり、最も一般的に付加されるのは空間的な情報であると述べている。「聞き手領域指示」における空間情報もまた、聞き手に指示対象に関する手がかりをより多く与えるために、Burenhult (2003) が記述した過程を経て、「聞き手の注意の存在」を示すソ系から派生したより特定のな情報であると考えられる。「聞き手領域指示」がより特定のな情報を持つ用法であることは、「聞き手の注意の存在」を示すソ系はア系と交替可能であるのに対し、「聞き手領域指示」はア系と交替できないことにも表れている¹³。

▶13 現在「聞き手領域」を意味化する過程にある指示詞体系としてティリヨ語 (Tiriyo) が挙げられる (Meira 2003)。ティリヨ語の中間形式は「聞き手領域指示」を行いつつも、「遠距離指示」の形式と交替可能であり、日本語指示詞ほど「聞き手領域」の意味化が進んでいないことが窺える。

▶14 堤 (2012) は (14a) のソ系を「中距離指示」と記述している。

(14) ソ系とア系の交替可能性

a. 「聞き手の注意の存在」を示すソ系

(タクシーの中で) 運転手さん、{そこ/あそこ} の角で降ろしてください。

b. 「聞き手領域指示」のソ系

(聞き手が持っているものを指して) {それ/*あれ} 何?

(堤 2012: 155)¹⁴

6 まとめ

以上、「聞き手の注意」概念を用いてソ系の現場指示用法、及び文脈指示用法を分析した結果、以下のことが明らかになった。

(15) 結論

- ソ系の「中距離指示」用法と文脈指示用法は「聞き手の注意の存在」を示す形式として統合される。
- 「間接経験領域」を「聞き手の注意が向けられていた、もしくは現在向けられている」と話し手が把握した要素を格納する領域と再記述することで、ソ系を間接指示的な形式と定義する談話管理理論に、ソ系の現場指示用法を自然に位置づけることが可能になる。
- ソ系の「聞き手領域指示」用法は、協調問題の解決を動機として「聞

き手の注意の存在」を示す用法から派生したより特定の用法である。

以上のように、近年の類型論的な指示詞研究で用いられている「聞き手の注意」という概念によってソ系を記述することで、トルコ語のsuやジャハイ語のton等、他言語の指示詞体系に含まれる指示形式とソ系を対照分析することが可能になる。

日本語、韓国語、トルコ語の指示詞を対照分析した金水・岡崎・曹（2002：241-3）は、トルコ語のsuについて、林（1989）の分析に基づき「対象を談話に新規導入する談話標識である」と言及している。しかし、suとソ系の関係については、近称、遠称の形式と比べて「はっきりした用法が認められなかったり、分布が複雑・微妙であったりするなど、記述が難しい」形式であり、どちらも「典型的な用法からかなりはずれた用法」を持つ中称指示詞であるという表面的な一般化をするにとどまっている。

しかし、上で示したように、「聞き手の注意」という観点からsuとソ系を見れば、両者の分布が対照的であることも説明ができ、より精緻な対照分析が可能になる。また、ソ系と同様「聞き手の注意の存在」を示すジャハイ語指示詞tonは、談話文脈内で言語的先行詞を指す用法、そして指示の値が特定できない対象を指す用法も持つ（Burenhult 2003：366-7）。tonのこれらの用法は、ソ系の文脈照応用法、曖昧指示と明らかに連続性を持つ。このように「聞き手の注意」概念を導入することで、国語学・日本語学における指示詞研究の枠組みでは特殊な形式だと考えられていたソ系を、言語一般的な指示形式として、他の言語の指示詞と対照させながら分析することが可能になる。

参考文献

- Burenhult, Niclas (2003) Attention, accessibility, and the addressee: The case of the Jahai demonstrative ton. *Pragmatics* 13(3): 363-379.
- Diessel, Holger (1999) *Demonstratives: Form, function, and grammaticalization*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Diessel, Holger (2006) Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics* 17(4): 463-489.
- Enfield, Nick J. (2009) *The anatomy of meaning: Speech, gesture, and composite utterances. Language, culture and cognition* 8. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林 徹 (1989) 「トルコ語のすすめ3『これ・それ・あれ』あれこれ」『月刊言語』18 (1): 96-101.
- 平田末季 (2013) 「距離から共同注意へ—『聞き手の注意』を用いた『中距離指示』のソ系の再分析—」『日本認知言語学会論文集』13: 461-472.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi, Ueyama. (2003) The Demonstratives in Modern Japanese” In Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form, and Interaction: Perspective from East Asian Languages*. London and New York: Routledge Curzon, 97-128.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語」『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京：東京大学出版会，217-247.
- 金水敏・田窪行則（編）(1992a)『日本語研究資料集 指示詞』東京：ひつじ書房。

- 金水敏・田窪行則 (1992b) 「日本語指示詞研究史から／へ」 金水敏・田窪行則 (編), 151-192.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」 『自然言語処理』 6 (4) : 67-91.
- 久野璋 (1973) 「コ・ソ・ア」 金水敏・田窪行則 (編), 69-73.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of Japanese Language*, The MIT Press: Cambridge.
- Küntay, C. Aylin and Özyürek, Aslı (2006) Learning to use demonstratives in conversation: what do language specific strategies in Turkish reveal? *Journal of Child Language* 33: 303-320.
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」 金水敏・田窪行則 (編), 91-104.
- Meira, Sérgio (2003) 'Addressee effects' in demonstrative systems: The case of Tiriyo and Brazilian Portuguese. In F. Lenz (ed.) *Deictic conceptualization of space, time and person*, 3-11. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- 岡崎友子 (2010) 『ひつじ研究叢書〈言語編〉第77巻 日本語指示詞の歴史的研究』 東京：ひつじ書房.
- Özyürek, Aslı (1998) An analysis of the basic meaning of Turkish demonstratives in face-to-face conversational interaction. In: S. Santi, I. Guaitella, C. Cave and G. Komopczynski (eds.) *Oralité et gestualité: Communication multimodale, interaction*, 609-614. Paris: L' Harmattan.
- 阪田雪子 (1971) 「指示語『コソア』の機能について」 『東京外国語大学論集』 21 : 125-138.
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』 東京：厚生閣. [佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法《増補版》』 東京：くろしお出版.]
- 正保勇 (1981) 『『コソア』の体系』 『日本語の指示詞日本語教育指導参考書8』 東京：国立国語研究所, 51-122.
- 田窪行則 (2008) 「日本語指示詞の意味論と統語論 —研究史的概説—」 『語学教育フォーラム』 第16号 東京：大東文化大学語学教育研究所, 311-337.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理理論」 『認知科学』 3 (3) : 59-74.
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』 東京：ココ出版.
- 上山あゆみ (2000) 「日本語から見える「文法」の姿」 『日本語学』 4月臨時増刊号vol.19 東京：明治書院, 169-181.

(平成25年10月31日受理、平成25年12月13日採択)